

紅梅

渋谷栄一 訳

第一章 紅梅大納言家の物語 娘たちの結婚を思案

「第一段 按察使大納言家の家族」

そのころ、按察使大納言と申し上げる方は、故致仕の大臣の次男である。お亡くなりになった衛門督のすぐ次の方であるよ。子供の時から利発で、はなやかな性質をお持ちだった人で、ご出世なさるに年月とともに、今まで以上にいかにも羽振りがよく、理想的なお暮らしぶり、帝の御信望もまことに厚いものであった。

北の方が二人いらつしやつたが、最初の方はお亡くなりになって、今いらつしやる方は、後太政大臣の姫君で、真木柱を離れがなくなつた姫君を、式部卿宮家の姫として、故兵部卿の親王に御縁つけ申し上げなさつたが、親王がお亡くなりになって後、人目を忍んではお通いになつたが、年月がたつたので、世間に遠慮することもなくなつたようである。

お子様は、亡くなった北の方に、二人だけいらつしやつたので、寂しいと思つて、神仏に祈つて、今の北の方に、男君を一人お儲けになつていた。故宮との間に、女君がお一人いらつしやる。分け隔てをせず、どちらも同じようにかわいがり申し上げなさつてはいるが、それぞれの御方の女房などは、きれいな事には行かない気持ちも交じつて、厄介なもめ事も出てくる時があるが、北の方が、とても明朗で現代的な人で、無難にとりなし、ご自分に辛いようなことも、穏やかに聞き入れ、よく解釈し直していらつしやるので、世間に聞き苦しい事なく無難に過ごしているのであった。

「第二段 按察使大納言家の三姫君」

姫君は、同じ年頃で、次々と大きくおなりになったので、御裳着などお着せ申し上げなさる。七間の寝殿を、広く大きく造つて、南面に、大納言殿と大君、西面に中の君、東面に宮の御方と、お住ませ申し上げなさるのであった。

おおかたの想像では、父宮がいらしやらないお気の毒なようであるが、祖父宮方と父宮方からの御宝物がたくさんあつたりして、内々の儀式や普段の生活など、奥ゆかしく気品のあるお暮らしぶり、その様子は申し分なくいらつしやる。

例によつて、このように大切になさつておられるという評判が立つて、次々と申し込みなさる方が多く、帝や、春宮からも御内意はあるが、帝には中宮がいらつしやる。どれほどの方が、あのお方にこ比肩申せよう。そうかといつて、及ばないと諦めて卑下するのも、宮仕えする甲斐がないだろう。春宮には、右大臣殿の女御が、並ぶ人がないように伺候していらつしやるのは、競い合いくいが、そうとばかり言つていられようか。人よりすぐれているだろうと思つた姫君を、宮仕えに出すことを諦めてしまつては、何の望みがあるのか」とご決意なさつて、入内させ申し上げなさる。十七、八歳のほどで、かわいらしく、派手やかな器量をしていらつしやつた。

中の君も、引き続き、上品で優美で、すつきり落ち着いた点では大君に勝つて、美しくいらつしやるようなので、臣下の人では、惜しく気が進まないご器量なのを、兵部卿宮が、そのように望んでくださったら、などとお思いになつていた。この若君を、宮中などで御覧になる時は、お召しまとわせ、遊び相手になさつてはいる。利発であつて、将来の期待される目もとや額つきである。

「弟と付き合つただけでは終わりたくない」と、大納言に申し上げよ、などとお話しかけになるので、「しかしか」と申し上げると、微笑んで、「まことにその甲斐があつた」と思ひになつていた。

「人に負けるような宮仕えよりは、この宮にこそ、人並みの姫君は差し上げたいものだ。思いのままにまかせて、お世話申し上げることになったら、寿命もきつと延びる気がする宮のご様子である」

とおつしやりながら、まず、春宮への御入内の事をお急ぎになつて、春日の神の御神託も、わが世にもしや現れ出て、故大臣が、院の女御の御事を、無念にお思ひのまま亡くなつてしまつたお心を慰めることがあつてほしい」と、心中に祈つて、入内させなかつた。たいそう御寵愛である由を、人びとはお噂申す。

このような後宮生活にお馴れにならないうちは、しつかりしたご後見がなくてはどんなものかと、北の方が付き添つていらつしやるので、ほんとうにこの上もなく大切に思つて、ご後見申し上げなされる。

「第三段 宮の御方の魅力」

殿は、所在ない心地がして、西の御方は、一緒にいることに馴れていらつしやたので、とても寂しく物思ひに沈んでいらつしやる。東の姫君も、よそよそしくお互いになさらず、夜々は同じ所にお寝みになり、いろいろなお稽古事を習ひ、ちよつとしたお遊び事なども、こちらを先生のようにお思い申し上げて、大君も中の君も習つたり遊んだりしていらつしやつた。人見知りを世間の人以上になさつて、母北の方にさえ、ちゃんとお顔をお見せ申し上げることもなさらず、おかしなほど控え目でいらつしやる一方で、氣立てや雰囲氣が陰氣なところはなく、愛嬌がおりであることは、それは、誰よりも優れていらつしやつた。

このように、春宮への入内や何かやかと、ご自分の姫君のことばかり考へてご準備するのも、お氣の毒だと思ひになつて、
「適当なご縁談をお考えになつておつしやつてください。同じように、お世話いたしましょう」
と、母君にも申し上げなかつたが、

「まづたくそのような結婚の事は、考えようもしない様子なので、なまじつかの結婚は、氣の毒でしょう。ご運命にまかせて、自分が生きている間はお世話申そう。死後はかわいそうで心配ですが、出家してなりとも、自然と人から笑われ、軽薄なことがなくて、お過ごしになつてほしい」
などと、ちよつと泣いて、宮のご性質が立派なことを申し上げなされる。どの娘も分け隔てなく親らしくなされるが、ご器量を見たいと心動かされ

て、お顔をお見せにならないのが辛いことだ」と恨んで、こつそりと、お見えにならないか」と、覗いて回りなされるが、全然ちらりとさえお見えにならない。

「母上がいらつしやらない間は、代わつてわたしが参りますが、よそよそしく分け隔てなされるご様子なので、辛いことです」

などと申し上げて、御簾の前にお座りになるので、お返事などを、かすかに申し上げなされる。お声、様子など、上品で美しく、容姿や器量が想像されて、立派だと感じられるご様子の人である。ご自分の姫君たちを、誰にも負けないだろうと自慢に思つているが、この姫君には、とても勝てないだろうか。こうだからこそ、世間付き合ひの広い宮中は厄介なのだ。二人といまいと思つのに、それ以上の方も自然といることだろう」となどと、ますます氣がかりにお思ひ申し上げになされる。

「第四段 按察使大納言の音楽談義」

「ここ幾月、何となくごたごたしていたが、お琴の音さえ聴かせて戴かないで久しくなつてしまつた。西の方にあります人は、琵琶に熱心でございませうが、そのように上手に習得できると思つているのでしうか。中途半端にしたのでは、聞きにくい楽器の音色です。同じことなら、十分に念を入れて教えて上げてください。

老人は、特別に習つたものはございませんでしたが、その昔、盛りだつたところに合奏に加つたお蔭でしうか、演奏の上手下手を聞き分ける程度の区別は、どのような楽器にもひどく不案内ということはございませんでしたが、氣を許してお弾きになりませんが、時々お聴きするあなたの琵琶の音色は、昔が思ひ出されます。

故六条院のご伝授では、右大臣が、今でも世に残つていらつしやいます。源中納言、兵部卿宮は、どのようなことでも、昔の人に負けないほど、まことに前世からの因縁が格別でいらつしやる方々で、音楽の方面は、特別に熱心でいらつしやるので、手さばきの少し弱々しい撥の音などが、大臣には負けていらつしやるかと存じておりますが、このお琴の音色は、とてもよく似ていらつしやいます。

琵琶は、押し手を静かにするのを上手とする都言いますが、柱を据えた時、撥の音の様子が変わって、優美に聞こえるのが、女性のお琴としては、かえって結構なものです。さあ、合奏なさいませんか。お琴を持って参れ」とおっしゃる。女房などは、お隠れ申している者はほとんどいない。たいていそう若い上臈ふうの女房が、姿をお見せ申し上げまいと思つて居るのは、勝手に奥に座つて居るので、お側の女房までがこのように気ままに振る舞うのが、おもしろくない」と腹をお立てになる。

第二章 匂兵部卿の物語 宮の御方に執心

「第一段 按察使大納言、匂宮に和歌を贈る」

若君は、宮中へ参内しようと、宿直姿で参上なさつたが、特別にきちんとした角髪よりも、とても美しく見えて、たいそうかわいいとお思ひになつて居た。麗景殿に、おことづけを申し上げなさる。

「お任せ申して、今夜も参ることができない、気分が悪いのだ、などと申し上げよ」とおっしゃつて、「笛を少しおつとめ申せ。どうかすると、御前の御合奏に召し出されるが、はらはらさせられることだ。まだとても未熟な笛なので」

とほほ笑んで、双調を吹かせなさる。たいそう美しくお吹きになるので、「まままあになつて行くのは、この辺りで、何かの折りに合奏するからである。ぜひ、お琴をお弾き合わせ頂きたい」

とお責め申し上げなさるので、辛いとお思ひの様子であるが、爪弾きにとてもよく合わせて、ただ少し掻き鳴らしなさる。口笛を、太い音で物馴れた声で吹いて、この東の端に、軒に近い紅梅が、たいそう美しく咲き匂つて居るのを御覧になつて、

「お庭先の梅が、風情あるように見える。兵部卿宮は、宮中にいらつしやるそつだ。一枝折つて差し上げよ。知る人は知つて居る」と言つて、ああ、光る源氏、といわれたお盛りの大将などでいらしたころ、子供で、このようにしてお仕え馴れ申したのが、年とともに恋しいことです。

この宮たちを、世間の人も、たいそう格別にお思ひ申し上げ、なるほど誰からも誉められるようになつたご様子であるが、まづたく問題に思われなさらないのは、やはり絶世の方だとお思ひ申し上げた気持ちのせいでしょうが。

世間一般の立場から、お思ひ出し申し上げるのに、胸の晴れる時もなく悲しいので、身近な人に先立たれ申して、生き残つて居るのは、並々でなく長生きを辛いことであるつ、と思われます」

などと、申し上げなまつて、しみじみと索漠とした子持ちで回想し沈んでいらつしやる。

折が折とて堪えることができなかったのか、花を折らせて、急いで参上させなさる。

「しかたない。昔の恋しい形見としては、この宮だけだ。釈迦のお隠れになつた後には、阿難が光を放つたというが、再来されたかと疑う賢い聖がいたが、間に迷う悲しみを払うよすがとして、申し上げてみよう」とおっしゃつて、「考えがあつて風が匂わす園の梅に、さうそく鶯が来ないことがありまじょうか」

と、紅の紙に若々しく書いて、この君の懐紙にませて、押したたんでお出しになるのを、子供心に、とてもお親しくしたいと思つので、急いで参上なさつた。

「第二段 匂宮、若君と語る」

中宮の上の御局から、「宿直所にお出になるところである。殿上人が大勢お送りに参上する中から、お見つけになつて、

「昨日は、どうしてとても早く退出したのだ。いつ参つたのか」などとおっしゃる。

「早く退出いたしましたのが残念で、まだ宮中にいらつしやると人が申しましたので、急いで参上したのですよ」

と、子供らしいものの、なれなれしく申し上げる。

「宮中でなく、気楽な所でも、時々遊びなさい。若い人たちが、誰彼となく集まる所だ」

とおっしゃる。この君を一人だけ呼んでお話になるので、他の人びとは、近くには参らず、退出して散って行ったりして、静かになったので、

「春宮におかれては、お暇を少し許されたようだね。とてもひどくお目をかけられてお側離さずにいらっしやうたようだが、寵愛を奪われて体裁が悪いようだね」

とおっしゃるのぢ、

「お側から離してくださいさう困ってしまいました。あなた様のお側でしたら」と、途中まで申し上げて座っているのぢ、

「わたしを、一人前でないと敬遠しているのだな。もつともだ。けれどももしろくないな。古くさい同じ血筋で、東の御方と申し上げる方は、わたしと思ひ合ってくださいさうかと、こつそりとよく申し上げてくれ」

などとおっしゃる折に、この花を差し上げると、ほほ笑んで、

「こちらから恨み言を言つた後からだったら」

とおっしゃって、下にも置かず御覧になる。枝の様子や、花ぶさが、色も香も普通のととは違っている。

「園に咲き匂っている紅梅は、色に負けて、香は、白梅に劣ると言つようだが、とても見事に、色も香も揃つて咲いているな」

とおっしゃって、お心をとめていらっしやる花なので、効があつて、ご賞美なさる。

「第三段 匂宮、宮の御方を思つ」

「今夜は宿直のようだ。そのままじぢぢ」

と、呼んだままお離しにならないので、春宮にも参上できず、花も恥ずかしく思うくらい香ばしい匂いで、お側近くに寝かせなされたので、子供心に、またとなく嬉しく慕わしくお思い申し上げる。

「この花の主人は、どうして春宮には行かれなかつたのだ」

「存じません。もの分かる方になどと、聞いておりました」

などとお答え申し上げる。大納言のお気持ちは、実の娘を考えているようだ「と思ひ合わせなさるが、思つていらっしやる心は別のほうなので、このお返事は、はつきりとはおつしやらない。

翌朝、この君が退出する時に、気のりしない態度で、

「花の香に誘われそんな身であつたら、風の便りをそのまま黙つていましよつか」

そうして、やはり今は、老人たちに出しゃばらせずに、こつそりと「と、繰り返しおつしやうて、この君も、東の御方を、大切に親しく思つ気持ちは増した。

かえつて他の姫君たちは、お顔をお見せになつたりして、普通の姉弟みたいな様子であるが、子供心に、とても重々しく理想的でいらっしやる性質を、お世話しがいのある方と結婚させてあげたいものだ」と日頃思つていたが、春宮の御方が、たいそう華やかなお暮らしていらっしやるのにつけて、同じ嬉しいこととは思つものの、とてもたまらなく残念なので、せめてこの宮だけでも身近に拝見したいものだ」と思つてうろろしている時に、嬉しい花の便りのきつかけである。

「第四段 按察使大納言と匂宮、和歌を贈答」

これは、昨日のお返事なのでお見せ申し上げる。

「憎らしくもおつしやるなあ。あまりに好色な方面に度が過ぎていらっしやるのを、お許し申し上げないとお聞きになつて、右大臣や、わたしどもが拝見するには、とてもまじめに、お心を抑えていらっしやるのがおもしろい。好色人というのに、資格十分なご様子を、無理してまじめくさつていらっしやるのも、見所が少なくなることになるつじ」

などと、悪口を言つて、今日も参らせなさる折に、また、

「もともとの香りが匂つていらっしやるあなたが袖を振ると、花も素晴らしい評判を得ることでしょう。と好色がましく、恐縮です」

と、本気にお申し込みになつた。本当に結婚させようと考えているところがあるのだからと、そうはいつてもお心をときめかしなさせて、

「花の香を匂わしていらっしやる宿に訪ねていったら、好色な人と人が咎めるのではないでしょうつか」

など、やはり胸の内を明かさないのでお答えなさるので、憎らしいと思つていらっしやうた。

北の方が退出なさって、宮中辺りのことをおっしゃる折に、

「若君が、先夜、宿直をして、退出した時の匂いが、とても素晴らしいので、人は普通の香と思つたが、東宮が、よくお気づきなさつて、兵部卿宮にお近づき申したのだ。なるほど、わたしを嫌つたわけだ」と、様子を理解して、恨んでいらつしやうした。こちらに、お手紙がありましたか。そのようにも見えませんでしたか。」

とおっしゃると、

「その通り。梅の花を賞美なさる君なので、あちらの建物の端の紅梅が、たいそう盛りに見えたのを、放つておけず、折つて差し上げたのです。移り香は、なるほど格別です。晴れがましい宮中勤めをなさるような女君などは、あのように焚きしめられないな。」

源中納言は、このように風流に焚きしめて匂わすのではなく、人柄が世に又とない。不思議と、前世の宿縁がどんなであつたのかと、知りたいほどだ。

同じ花の名であるが、梅は生え出た根ざしが大したものだ。この宮などが賞美なさるのは、もつもなことだ。」

などと、花にかこつけて、まずはお噂申し上げなさる。

「第五段 匂宮、宮の御方に執心」

宮の御方は、物の分別がおつきになるくらいに成人なさつていたので、どのようなことでもお分りになり、噂を耳になさつていらつしやらないではないが、人と結婚し、普通の生活を送ることは、けつして」と思い離れていた。

世間の男性も、時の権勢に追従する心があつてだろうか、本妻の姫君たちには熱心に申し込み、はなやかな事が多いが、こちらの方には、何かにつけて、ひっそりと引き籠もつていらつしやうしたのを、宮は、おふさわしい方と伝え聞きなさつて、心底、何とかして、とお思いになつてしまつた。

若君を、いつも側を離さず近づけなさつては、こつそりとお手紙をやるが、大納言の君が、心からお望みになつて、そのようにお考えになつてお申し込まれることがあるならば」と、様子を理解して、準備なさつてい

のを見ると、気の毒になつて、

「予想に反して、このように結婚を考えてもいない方に、かりそめにせよ、お手紙をたくさんくださるが、効のなさそうなこと。」

と、北の方もお思いになりおっしゃる。

ちよつとしたお返事などもないので、負けてたまるかとお考えも加わつて、お諦めになることもおできになれない。何の遠慮があるものか、宮のお人柄に何の不足があるう、そのように結婚させてお世話申し上げたい、將來有望にお見えになるのだから」など、北の方はお思いになることも時々あるが、とてもたいそう好色人であつて、お通いになる所がたくさんあつて、八の宮の姫君にも、お気持ちがあつて、たいそう足しげくお通いになつていゝ。頼りがいのないお心で、浮気つばさなども、ますます躊躇されるので、本気になつてはお考えになつていないが、恐れ多いばかりに、こつそりと、母君が時折さし出してお返事申し上げなさる。

